

使徒言行録1章6-8節
『地の果てまで証人となる』

昨年の4月から礼拝において聞き始めた使徒言行録、先週28章の終わりまですべて読み終わりました。今朝は、最後まで読み終えたわたしたちがもう一度使徒言行録の最初の1章に戻って、使徒言行録全体のメッセージを受けとめて、使徒言行録の講解説教を終えたいと思います。

使徒言行録は主イエスが十字架で苦難の死を遂げ、神によって復活させられて、弟子たちのところへおいでくださったそこから始まります。弟子たちは主イエスの十字架の直前、主イエス裏切り、逃げ出し、散り散りバラバラになった。にもかかわらず、主はその彼らのもとにおいでくださったのです。

弟子たちは主イエスに尋ねます。「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか。」これは弟子たちにとってとても大事な質問でした。しかしわたしたちにはとても分かりにくい質問です。

イスラエルの人々はユダヤ教の伝統の中で、終末の 때가やがて来ることを固く信じている人がたくさんいました。そしてその終末の時には、救い主があらわれ、イスラエルが全世界を統治する、その建て直しの時は今ですか、と尋ねたのです。

弟子たちはそういう救いのイメージを持っていたのです。「栄光をお受けになるときわたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」つまり主イエスがほんとうの王さまになる時が来たら、わたしたちを大臣にしてください、と言ったのです。彼らのおめでたさは今置くとして、主イエスが十字架で死んだにもかかわらず神によって復活させられてこられた以上、まことの王として世界に君臨する時が来たのではないか。ローマ帝国よりももっと巨大で、力強いまことの王国をたて、イスラエルの民を王のもとに立て、偉大な力を発揮し、世界に君臨する。それが弟子たちの救いのイメージであり、終末のイメージでもあったのです。

イエス・キリストが王さまになって、自分たちがその大臣になって、イスラエルの国が世界を統治する。

その弟子たちの質問に対して主イエスが言われたのは、終末の時は神がお決めになることで、あなた方の知るところではない、ということ、「あ

なた方の上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」ということでした。大臣になってふんぞり返るのではない。イエス・キリストを証しし、福音を世界に伝道するものとなるのだ、ということです。

弟子たちは全く驚いたと思います。伝道はキリストがなさるもので、自分たちはただついていっただけだと思っていたはずでず。

しかしその弟子たちが聖霊を受けて、キリストの証人として、一人一人が福音を宣べ伝える者として歩みだし、教会が生まれ、伝道が進められていった、その様子が使徒言行録には記されているのです。しかも、キリストの証しをするのは、使徒と呼ばれた特定の者たちだけでない。キリストの恵みを受けて信じた者たちは誰でも、証人となって歩いていく。だから使徒言行録には、たくさんのキリストの証人が出てくる。ここには子細に読むと実に多くの人たちがキリストの証人として歩んだ記録がある。

使徒言行録は、キリスト者とはイエス・キリストの証人として生きる者のことである、と語っている。聖霊の力を受けて、キリストの証人として生きる、それがキリストを信じて生きる、ということだ、と語っている。だから、わたしたちは「証人」という言葉を、もう一度じっくりと受けとめたいと思うのです。

証人という言葉は、日本語の辞書を引くと「事実を証拠立てる人」とか、「事実を証明する人」と出てきます。おそらくこの辞書の語釈の感覚が多くいきわたっている。しかしもしそうだとすれば、イエス・キリストの復活の証人というのは、復活を証明する人、証拠立てる人ということになります。

もし聖書における証人という言葉が日本語の意味だけであれば、わたしたちには証人となることはできない。なぜなら復活を証明することも、証拠立てることもわたしたちにはまるで無理だからです。わたしたちの手には余ることです。聖書で言う証人は、証しする人、その場合の証しとは証明するとか、証拠立てるのではなく、自分の経験した事柄の真实性を、確信を持って語ること、なのです。

わたしたちはキリストの復活を証明することはできない。

しかし自分が、イエス・キリストの十字架と復活によって救われていること、背負われ、活かされていることは証しできる。その場合の証しとは、何も言語によるものだけとは限らない。その人の生きる姿、日常の些細な行動、

人とのかわり、見つめる方向。そういうことの全部が証しという言葉に込められている。

聖書の言葉を駆使して、どんな相手であれ論破するのが証しなのではない。一人の罪人である自分が、隣人愛に生きることにおいてあまりに貧しい自分が、神への愛においてもまことに貧しい自分が、どういうわけかキリストの愛に背負われ、活かされ、キリストのいのちの中で生かされている、終末における神の救いへと導かれている、そのことを信じさせられ、感謝して受けとめて生きるのであるなら、その人の歩みのすべてはキリストの十字架と復活の証しになる。

けれどももう少し考えてみる。証しというものが、自分が経験していること、自分が出会っていることが、自分の日々の歩みの中で否応なくあらわされてくるのだとするのなら、つまり証しする、というより生活が証しするものになっていくのだとすれば、わたしたちはこの人生で結局何を証しするものになっているのか。

例えば、中途半端に学んで、中途半端に何かを知って、神さまのことを思うよりも、だらだらと自分本位に生きている、ということが自分の人生で証しされる、ということか。そうなのかもしれない。たいてい中身の無い人生がそのまま証しされるということでもある。実際、子どもが受け取っている親の姿というのは、何も立派なことだけでなく、こういうところがだらしなかったとか、この部分は虚勢を張っていたとか、こんなことで夫婦げんかしていたとか、証しとは、何も格好いいことばかりではない。われわれの生活の全部が証しなら、証しされるものはみっとものいいものではなく、中途半端でだらだらとしたもの。聖書もどれだけ読んだのか、どれだけわかったのか。すべてが中途半端、そういう姿が証しされているのかもしれない。自分の経験した事柄の真実性を、確信を持って語る、というところは大きくそれていくような気がする。

わたしは聖書が語る証し、証言というものは、裾野の広いものだと思います。わたしたちの生活の全部が証しになるというふうに思います。しかし、聖書が語るのは、その人の生活を通して証しされるその人なのではない。証しされるのはキリストです。キリストの証人になると言われる。中途半端でダラダラしていたその人がそれでもなお出会い続けていたキリスト、それでもなお愛され、活かされていたキリストの信実、それがその人の生活を通して証しされるキリストということなのです。わたしたちは、しばしば、

自分にはキリストを証しするような立派なものはない、と言って、証しは自分には無縁だという。それはまったくの傲慢です。別にその人の立派な部分でキリストが証しされるというのではない。立派であろうが中途半端であろうが、その人が証しされることが問題なのではない。立派であろうがなかろうが、（キリストの前で立派な人などどこにもいないのですが）このわたしに出会い続け、このわたしを愛し続けてくださり、このわたしに命を与えてくださるキリスト、この方がわたしを通して証しされるのです。だからキリスト者である我々にとって本当に大事なことは、この自分に出会い続けてくださる方、この自分を愛してくださる方に、わたしの方からも出会い続ける、キリストが出会ってくださることに自覚的になっていくことです。

パウロは、自分の回心の出来事の中で、最初に語りかけてくださったキリストの言葉に、キリストという方に何度でも帰っていきました。戻っていきました。キリストに語りかけられている自分に自覚的でありました。

わたしは二親を天にすでに送りましたが、父と母から受けた愛情、その言葉を、よく思い出します。あの時、父が言ってくれた言葉、母が言ってくれた言葉、よく思い出します。その言葉の中にある自分を思います。

わたしは、キリストの言葉の一つ一つを思います。この自分に語りかけてくださっている言葉をできるだけ丁寧に思い起こし、もう一度聞きます。また聞きます。さらに聞きます。そして十字架と復活の主に根本から支えられていることを聖餐において思い起こし、知らされます。キリストに出会い続ける、恵みを受け続ける、その中で聖霊が働いて、わたしたちがどんな貧しい者であっても、どんなに中途半端なものであっても、キリストの証し人としてお用いくださり、活かしてくださる、そのことを信じて、証人としての自覚をもって残りの人生を歩んでいきましょう。